



(沖縄タイムス社提供)

いしはら・まさひえ 沖縄国際大学名誉教授。1941年、台湾生まれ。那霸市首里出身。70年から沖縄戦体験者の聞き取りを始める。全戦没者刻銘碑「平和の礎」刻銘検討委員会座長、沖縄県平和祈念資料館監修委員などを歴任。91年に第3次家永教科書裁判で原告側証人として、2010年には沖縄靖国神社合祀取消訴訟で原告側専門家証人として、それぞれ証言。著書に「援護法で知る沖縄戦認識—捏造された『眞実』と靖国神社合祀」など。

新型コロナウイルス 感染症の影響が残った ことを踏まえ、特別 紙面で編成しております。 読者の皆さまには、 ご理解いただきますよう、 よろしくお願いいたします。

「コロナ対策で規模を縮小したとしても、場所を変える必要は全くない。県の認識不足に驚きました」
沖縄戦研究の第一人者、沖縄国際大学名誉教授の石原昌家さん(79)。「平和学」は一報に触れた際の胸の内を振り返る。
「国立墓苑は戦難に殉じた戦没者の遺骨を祀る国家施設。殉国の死生觀と結び付いた場所で追憶式を開催すれば、住民の犠牲が『崇高な殉國死』として絡め取られ、凄惨な戦闘に巻き込まれた被害の実相が覆い隠されてしまう。コロナ対策だから仕方がないと行政の

にわたり、県民が集い、初り、追悼し平和発信を積み重ねてきた歴史的な場所といたします。△國家の施設である国立墓苑で、沖縄戦犠牲者の追悼式をすることは、国家が引き起した戦争に巻き込まれて肉親を亡とした県民の感情とは相容れないのではないか。このような違和感はどういうべきか。県民が覚える場所ではなく、遺骨を見つからない方も含めて、個人の名前を敵味方なく刻んだ「平和の碑」のそばの、内外に開かれた空間である平和祈念公園広場が適切と考えます。

沖繩・追悼式開催地問題

近くの式典広場から、公園内の「国立沖縄戦没者墓苑」に変更すると発表。県民や研究者から「殉国死の追認になりかねない」「追悼式の意味が変わってしまう」と批判が相次ぎ、一転して從来通りの式典広場で開催した。戦後75年、記憶の継承は沖縄に限らぬ深刻な課題だ。歴史認識と死者を悼む在り方という普遍的な問いを投げ掛ける。(田中 大樹)

(田中 大樹)

コロナ禍、でも言わねば

豪爽に水だった。

平和
つなく
慰靈の日(土)

慰靈の日(上)

決定に異論を唱えないといつ邊抗は、ありませんでした」
行動は早かった。問題意識を共有する研究者や近現代史家、ライターらと、追憶式の在り方を考える県民の会を立ち上げた。共同代表に就き、開催地を巡る県への要請書にはこう綴った。